

新刊紹介

《仏典講座18》『俱舎論』

校 部 建 著

阿毘達磨仏教は、仏教が思想として歴史のなかに大きく転回するにいたる一つの重要な契機であった。「最近のインド仏教の思想的研究の進展は、再び阿毘達磨の意義の新たな認識に向かいつつある」と著者も指摘するように、なかでも説一切有部のダルマテオリーは、その新たな意義が見直されることによって、仏教思想史のうえに確かな地歩を占めることになるのでなければならぬ、といえる。このたび出版されたこの著書は、こういった研究事情のもとで好個の材料を供することにもなるであろう。

というのもこの著書の目指すところが、「アビダルマ論書の一つの完成態」である『俱舎論』の全貌を、それが与えるテーマ・テクニクのままに、読者の前に投げ出すところにある、と思われるからなのである。そのことはなによりも本書の構成が示している。本書は二編よりなる。第一編序説において、『俱舎論』の仏教史上における位置、その内容・組織、及びその研究史等が概観される。それをもってともあれ読者は、それが何であるか、を予料するであろう。第二編本文解説は二部よりなる。Ⅰ本頌、Ⅱ分別定品第八。読者はここで、それが如何にあるか、を知る。Ⅰ本頌では先ず、玄奘訳の偈頌のみが、各章各節に区切られ、第一章界品より第七章智品まで提示される。各章多くて六節に区切られているにすぎないので、そこに取り扱われているテーマは

判然と了解できる。また、各節ごとの偈頌の提示につづいてその書下しが与えられ、術語あるいは記号について多くの注解が付けられる。そして最後にいわゆる「本文解説」が示される。

ここに与えられる書下しは著者の批判的な読みに基づけられているのはいうまでもない。また術語のかくも平明な注解は、俱舎の世界に久しく親しく身をおいた著者にしてはじめてかくあることも自明である。しかしそれにもまして著者の本領が発揮されているのは、いわゆる「本文解説」にあるといえよう。というのは、俱舎論が如何にあるかを告げるテーマ・テクニクの略述が、ここに示されているからである。このような各章各節にわたる順をおったテーマ・テクニクの略述こそが俱舎論のおおまかな全体的構図ではなく、そのあるがままの全貌を読者の前に露にすることができるのである。

Ⅱ分別定品第八では、以上の形態をさらに拡大し長行が加えられ、サンスクリット原典より第八章全体が和訳されている。テーマ・テクニクの提示という著者の本来の意図がここに十全に表わされている。なぜなら偈頌は読まれるものではなく、詳細なテーマ・テクニクのための備忘録であったであろうと思われるからである。

ここに俱舎論研究の常識がもう一段高められることになったというべきものであるように思う。この書が多くの読者を獲得し、俱舎論、ひいては阿毘達磨の研究がより一層に進展することを切に願う。

(四六版 四〇〇頁 昭和五十六年四月 大蔵出版 三〇〇〇円)

(宮下晴輝)